

CONTENTS

尾道の祭り風土記 ～やまなみ編～	… 1 - 4 頁
コロナ禍の祭礼伝承	… 5 頁
里山に見る三体廻しの習わし	… 6 頁



美ノ郷町三成・三成八幡神社前 宮前橋の欄干にて、一芸を披露する猪子迫の大獅子舞 大本義彦氏蔵(三成学区の歴史と自然を訪ねる会提供) 戦前

尾道は祭りが多いまちと言われています。ここで言う祭りは神社仏閣の年中行事に見る祭礼であり、祭りが多いとされるのは、とりわけ尾道旧市街(尾道水道に面した中心市街)を指しての事です。

その祭礼を新市域で広く眺めて見ると、里山の祭り、まちの祭り、島の祭りと、それぞれで地域性に富んだ多様で多彩な祭礼文化を目にする事ができます。

里山にあつては、祭礼に彩を添えるものとして芸能性の高い「鉦太鼓踊り」が広範囲に伝承されます。

加えて「獅子舞」の分布も色濃く、御調や原田方面では地区毎に獅子舞の所有が見られたり、写真(上)の美ノ郷町猪子迫地区の大獅子舞にあつては、指定民俗文化財として歴史と伝統を有しました。

中心市街の都市部にも地域的な特色は見い出せ、街中では何と言つても「神輿」がその花形にあります。

猫の額のような狭小な尾道町内に、実に8基もの大人神輿が見られるのは、祭りの多さと如実に比例しています。豪勢なる住吉花火の賑わいと共に、商都ならではの経済力の程もそこに窺い知れます。

島嶼部・しまなみ地域に目を転じて見ると、宮島厳島神社の管絃祭に倣つての船祭り(海上渡御)、陸の上で船を担ぐ・曳くという形態の祭礼が特色として拾い出せます。また、因島地域では伊予地方とも通じるような「ふとんだんじり」が各地区に分布し、祭礼に欠かせない存在感を放っています。

そうした多様で多彩な尾道の祭り文化を、やまなみ編・まちなみ編・しまなみ編とシリーズ3部構成で、古写真の発掘収集とも連動する形でビジュアルにご紹介してみたいと思います。

コロナ禍でお祭りもままならない中ですが、この機会に尾道の祭礼文化を再認識して頂ければ幸いです。

※まちなみ編は続く10号にて、しまなみ編は11号にて特集します。

〔御調〕廿日胡（はつかえびす）

御調町市（いち）の商店街沿いに祀られた胡（えびす）神社の祭礼で、旧暦8月20日の夜に行われた。

祭礼に花を添えるものとして、御調の伝統芸能である「みあがりおどり」や手踊り、子ども達が曳く「だんじり」も繰り出した。沿道には「デコ」と呼ばれるそれぞれに趣向を凝らした木偶人形が飾られ、廿日胡の後継となる「御調町夏まつり」でも引き継がれていた。



人で溢れる廿日胡の夜（御調町・森嶋和真氏提供）

〔御調〕高御調八幡神社奉納みあがりおどり

県無形民俗文化財に指定される「みあがりおどり」は、御調川沿線の各集落に伝わった鉦太鼓系の民俗芸能。

その語源として、足利尊氏の「都（みやこ）上がり」から生じたともいうが、氏神へ奉納に上がる「宮上がり」が本来の意味ではないかと思われる。

丸河南地区の高台に鎮座する高御調八幡神社では、各地区揃っての宮上がり（みあがり奉納）が、四年に一度繰り上げられる。



高御調八幡神社奉納のみあがりおどり

〔原田〕相原八幡宮の当屋行事「宮座」

専門の神職がお宮を預かる以前は、その土地の特定の人達の手で祭祀が執り行われ、これを頭（当）屋（とうや）神主、組織的には宮座と称される。

原田梶山田の氏神・相原八幡宮の祭礼（秋祭り）では、神職定着以後もその当時の形を傳承し、宮座を構成する当家人群（全27軒）が、神職と共に持ち回りで祭礼を担い、とりわけ祭礼を締め括る「座直り」の儀式などに古態を留める。市無形民俗文化財。



祭礼を締め括る「座直り」の儀式

〔原田〕相原八幡宮例祭での三体廻し

相原八幡宮の祭礼（秋祭り）では、三体神輿による三体廻しが繰り広げられる。

三体はそれぞれ「本当」、「二当」、「三当」と呼ばれ、これは前述の当家人（とうや）と一致した呼称になる。

三体廻しは宮入りで行われ、境内に常設された土俵において、三つ巴の様に三体が周回する。

相原八幡の祭礼では、この他に獅子舞の芸能も古くから伝わるなど、着目すべき点が多い。



相原八幡祭礼での三体神輿廻し

〔木ノ庄東〕幣高八幡神社祭礼での鉦太鼓踊り

旧市原・木梨・山方の3カ村がうち揃って、氏神である幣高八幡神社へ奉納する鉦太鼓で、県の無形民俗文化財に指定されている。

木梨の鷲尾山城（中世の山城）の築城祝いが起源とされるが、稲の害虫除けを祈って農村部に見られた民俗信仰「虫送り」や、盆供養、雨乞い等に見る芸能としては、築城よりも更に以前から伝わるものと想像される。

こうした芸能は別に「風流（ふうりゅう）踊り」として括られる。



木ノ庄東の鉦太鼓踊り（旧尾道市史編さん室撮影）

〔木ノ庄西〕畑の鉦太鼓踊り

木ノ庄町畑に伝承する鉦太鼓踊りは、旧盆の7月15・16日、畑の各区が輪番で踊り、何十年に一度かという周期では、全集落合同で踊っていたという。

その由来は古老の言い伝えとして、源平合戦で敗走し、この地へ落ち延びた者の中で、滅亡した平家一門を偲び、供養の念で踊ったのが始まりという。

畑では平家の落人伝説とそのゆかりとする古い地名も伝えている。



熊野神社神楽殿の奉納絵馬に描かれる畑の鉦太鼓踊り

〔木ノ庄西〕木門田天満宮と天神獅子舞

木ノ庄町木門田地区にも鉦太鼓の芸能を伝えるが、ここでは木門田天満宮の祭礼で演じられる獅子舞（天神獅子舞）と称すも古くから伝承される。

木門田の上と中組地区に伝わる天神獅子舞は、御調郡八幡村（現三原市）に伝来した獅子舞を見た地元有志が、わが村にも同様な芸能をと、その技術を習得し、明治期より木門田の地にもたらした事に始まる。

舞には獅子三番叟、剣之舞、二継、三継等8種の技法がある。



木門田天満宮祭礼での天神獅子舞

〔美ノ郷〕木頃八幡神社の三体神輿と三体廻し

木頃の三体神輿は、木門田・本郷・中野の旧3カ村によって担われ、氏神である木頃八幡社の祭礼でその勇姿を見る。

俗に「けんか神輿」と称されるほど勇猛に担がれたこちらの神輿も、境内において「三体廻し」を披露し、原田の例に同じく境内常設の土俵でこれを行った。

別に神輿を空中へ放ち、落下してきたところをキヤッチする、いわば神輿の胴上げのような荒技は、他には無い特色である。



木頃八幡神社の三体神輿。屋根に下がる剣型の飾りが特色

〔美ノ郷〕三成八幡神社祭礼での三体廻し

三成八幡神社の秋の例大祭では、「二当」「二二当」「三当」と呼ばれる三体神輿がそれぞれの町内へ担ぎ出される。お宮へ帰還した三体は、境内において三体廻しを繰り広げる。今日では円形の石を軸に回されるが、かつては原田や木頃に回ると同じく土俵の上でこれを行っていたという。

尚現在では、鉦太鼓踊りの奉納と交互に行われる（隔年形式）。



三成の三体廻し（三成学区の歴史と自然を訪ねる会提供）

〔美ノ郷〕猪子迫大獅子舞

鉦太鼓踊りと共に、里山の内で点々と分布を見る祭礼風景に獅子舞の芸能がある。

中でも美ノ郷町猪子迫地区に伝わる大獅子舞は、市の無形民俗文化財に指定されるもので、次第にその高さを増して行く様は「継ぎ獅子」の系統に近い。

由来として、当地の六柱神社（通称・六柱権現）の裏山に猪が出没し、里人はこれを神のお使いと見て、猪に見立てた獅子頭を奉納し、祭礼で登場するようになったという。



猪子迫大獅子舞（三成学区の歴史と自然を訪ねる会提供）

〔美ノ郷〕浦島まつり

三成における浦島太郎伝説を縁起とする浦島神社の祭礼で、子どもの日の5月5日を祭日とし、子ども主体の祭りとして地元で親しまれる。

各地区から担ぎ出された子ども神輿が浦島神社に参集し、お祓いを受けた後、「当人」（とうにん）と呼ばれる男児と共に藤井川のたもととの河原へ向かい、そこでは当人を胴上げする風習が見られる。

祭りの盛り上げに創作された「浦島音頭」も近年になって再発見され、祭礼で復活披露された。



当人の胴上げ（三成学区の歴史と自然を訪ねる会提供）

〔久山田〕雨乞いルーツの鉦太鼓踊り

農事に欠かせない恵みの雨を求め、町内の大峰山の山上で火を焚いて神職が雨乞い祈願をし、それによって恵みの雨が得られた際に、喜びとお礼の形で奉納されたのが久山田の鉦太鼓踊りのルーツになるという。

戦時下の中で廃絶したが、昭和52年（1977）に地元消防団有志の発起で復活し、今日に引き継がれ、8月14日（本来は15日）の氏神社（八幡神社）の祭礼で奉納される。



久山田の鉦太鼓（尾道市立大学伝承文化研究会の報告書より）

コロナ禍の祭礼伝承

尾道市文化財保護委員・尾道市史編さん委員 住貞 義量

昨年来より、コロナが蔓延して世の中は随分変容というか、色んな所で自粛ムードになり、行事もままならぬ状態になっている。特に、高齢者にはワクチンを優先して接種しているが、大きなイベントなどは市内全域で中止に追い込まれている。それは、祭礼や伝統芸能の伝承などにも影響が出ており御調町においても町内7カ所の夏祭りなどは2

年連続の中止である。

今後コロナ感染の先は読めない状況である。こうした状況では、しっかりとした感染拡大防止の策を講じ、工夫をしながら祭礼や伝統行事を出来るものから伝承をしていかないと忘れ去られるおそれもある。その活動の一部を紹介する。

神田神社では、本格的な秋祭りで神楽などは



を演じた。所謂、小さな祭りである。昨年の夏（8月）に河内地区では、御調川の河川敷で有志が、コロナ退散を掲げて、踊った（写真上）。暑い一日でもあった。

上川辺の本地区では、金比羅講で「みあがりおどり」を有志が、宮司にコロナ退散の神事を行ってもらい、その後、集会所で踊った。年配のある人は、何年もしないと忘れられると言われた人もいる。

江戸時代に流行した疫病も当時の人々は、祈りを中心に「大丈夫（ますらお）神社」をはじめとして素戔嗚（すさのお）神社など「病氣平穩」の神社が建設されたものと思う。町内でも大丈夫神社に出くわす。

現在も高齢化が、益々進行している中、次世代に伝承しなければならぬ伝統芸能は、密を避けながら神事と共に工夫を凝らしながら行っていきたいものである。それが我々に課せられた課題でもある気がしてならない。

ないが、神事後、湯立て神事の中で「茅の輪くぐり」を取り入れて、コロナ退散祈願として、役員のみで行うなど工夫をしながら、宮司と神社の役員が一体となり、執り行っている（写真下）。

また、御調町の伝統芸能「みあがりおどり」も盆踊りで毎年、盛大に行っていたが、出来ないために、御調中央小学校は、「運動会」や「6年生を送る会」などで「みあがりおどり」を披露している。また、御調西小学校は、道の駅や萩八幡宮で「みあがりおどり」

を演じた。所謂、小さな祭りである。昨年の夏（8月）に河内地区では、御調川の河川敷で有志が、コロナ退散を掲げて、踊った（写真上）。暑い一日でもあった。

上川辺の本地区では、金比羅講で「みあがりおどり」を有志が、宮司にコロナ退散の神事を行ってもらい、その後、集会所で踊った。年配のある人は、何年もしないと忘れられると言われた人もいる。

江戸時代に流行した疫病も当時の人々は、祈りを中心に「大丈夫（ますらお）神社」をはじめとして素戔嗚（すさのお）神社など「病氣平穩」の神社が建設されたものと思う。町内でも大丈夫神社に出くわす。

里山に見る三体廻しの習わし



三成八幡神社秋祭りでの三体廻し



尾道祇園祭での三体廻し（尾道遺跡発掘調査研究所蔵）

三基の神輿が競り合いながら、グルグルと回転する「三体廻し」と呼ばれる特異な祭礼風景は、尾道市街の夏祭り・祇園祭（久保新開の八坂神社例大祭）で知られるところですが、同様な「三体廻し」は、北部地域にも分布している事はあまり知られていません。

美ノ郷町三成・三成八幡神社、同本郷の木頃八幡神社、原田町梶山田の楢原八幡宮の各秋祭り（例大祭）において、尾道で見ると同じ合う三体廻しが繰り広げられます。

尾道では幟旗（八坂神社と記す）を軸に神輿が回りますが、北部三例では境内に設けられた土俵の周囲を回る点が特色と言えます。

互いに通じ合う点は神輿の屋根に付された印（神紋）にも見い出せ、尾道と共に一つ巴・二つ巴・三つ巴の巴紋に分けられ、それぞれに担い手となる地区が振り分けられるところも一致しているところと見えます。

由来については不明ながら、三成の神輿は一説に、尾道祇園社の神輿を譲り受けたものという伝承も聞かれ、伝播経路を考える上で興味深いものがあります。

『新尾道市史』刊行計画

市制施行一二〇周年にあたる平成三〇年度（二〇一八）を振り出しに、令和十年度（二〇二八）までの十一年計画で、新市域を網羅しての『新尾道市史』を編さんします。今後の刊行スケジュールは次の通りです。

令和三年度（二〇二一）

文化財編 下巻

資料編 近世

令和四年度（二〇二二）

資料編 古代・中世

令和五年度（二〇二三）

資料編 近代・現代

民俗編

令和六年度（二〇二四）

地理編

令和七年度（二〇二五）

通史編 原始・古代・中世

令和八年度（二〇二六）

通史編 近世

令和九年度（二〇二七）

通史編 近代

令和十年度（二〇二八）

通史編 現代

WANTED

史資料や情報をお寄せください

古文書や古写真（写真絵葉書を含む）、古地図、尾道的话题を報じる古新聞など、市史編さん委員会事務局では、幅広い分野において尾道に関わる史資料を収集しています。また、無形の伝承（地域に伝わる言い伝えや独特な慣習、祭礼芸能等）についても収集対象となります。もし皆様のお宅や周辺で、あるいは地域で、そうしたものが発見された場合は、事務局へご一報ください。史資料については複製（写真撮影・コピー）を取らせていただくのみで、現物については速やかにお返しさせていただきます。情報提供は下記の事務局連絡先までお願いします。お電話での受付時間は平日8:30~17:00です。（文化財係：0848-20-7425）

編集後記 * 2021.9

猛暑もようやく過ぎ去り、秋風の心地よい時節となりましたが、いかがおすごしでしょうか。市民の皆さまにおかれましては、未曾有の災禍の中、大変なご苦労をされていることと案じております。

さて、今回は尾道の祭り風土記と題しまして、昨年に引き続き中止や縮小を余儀なくされている、お祭りに焦点を当てて特集いたします。平成18（2006）年に現在の新市域となった尾道市のお祭りは、里山、島嶼部を加えてより一層にぎやかになりました。1日でも早い復興を願い、本紙では市内のお祭りを概観していきたいと思っております。本号の「やまなみ編」から始まり、第10号では「まちなみ編」、第11号では「しまなみ編」をお送りいたします。どうぞお楽しみに!(I.M.)

※『市史広報』は年に2回程度の発行を予定しております。みなさんの様々なお声や情報をお待ちしております。